白金薄

１月号

平成２７年１月発行　　第４７号

白金葭定例句会案内

二月二十日(金) 12:00～15:00 ア第三学習室　兼題：山焼、鶯

三月二十日(金) 12:00～15:00 ア第三　兼題：斑雪(はだれ)、白子

四月十七日(金) 12:00～15:00 ア第四　兼題：涅槃西風、春興

山焼、鶯の参考句（二月二十日分）

風が火を火が風を呼ぶお山焼　小砂見曙美
蝦夷に渡る蝦夷山もまた焼くる夜に　河東碧梧桐
山焼くやひそめきいでし傍の山　芝不器男
山焼く火檜原に来ればまのあたり　水原秋櫻子
雨空にほつかりと山焼くるなり　臼田亜浪
雲の上に雪富士あって山を焼く　光成高志
ほーほけきょケキョと鳴く癖直らぬか　中尾和夫
鶯や洞然として昼霞　高濱虚子
今日からは裏方となり聞く初音　糸賀緋絽子
一声と思へば三声初音かな　野﨑高子
あかつきの鶯のあと雀たのし　西東三鬼
鶯や遠く重たき生木負ひ　平畑静塔

月例句会報（'15／1／16　7名欠5）（神楽、都鳥）

元旦のきのふと同じ顔洗ふ　飯田孝三
昭和生き元朝古き日の丸を
屠蘇なめて乙女のつやの耳ッ朶
初詣がてら七味のやげん掘
獅子の歯の奥に目ん玉ありにけり

EU崩壊かと新年のパンを食ふ　増田陽一
雪は北に捨てて青さよ首都の空
深酔ひは醒むる似たり初明り
先の世に見し門松と思ひけり
初鶏の声に覚めしは昔かな

初詣まこと六根椎の木に　光成高志
春・福てふ犬に邂逅二日かな
犬棒カルタぶっきら棒に読み下す
初泳後ろ後ろへ水送り

あわんとり唱和し点火あわんとり
（あわんとりはどんど焼きのこと）

口あけて喉の奥まで初日浴ぶ
正月の千両椋鳥むくに食はれけり
初読や柳田國男の恋の歌
掛り凧ポプラ並木の一本に
青竹の器と柄杓屠蘇受ける

光　みち

鶏の初鳴き一番電車まつ
初電車一輌目にて富士をみて
我が齢信じられずに雑煮かな
松過ぎの庭に黒猫三毛の猫
女正月ほんの少しの贅沢を

吉羽多美子

煮凝や夜どうし荒るる越の海
荒縄のへの字に焼けりどんど果つ
竹爆ぜて人輪広ごる飾り焚

倉田紀子

大皿のピザを真中に女正月
昼酒にマーラー語る炬燵かな（作曲家グスタフマーラー）

松村幸一

頼りなく回りはじめし独楽の澄み
黒豆の減るを淋しむちょろぎかな
ジーパンで葱買ふ芸者神楽坂
恋知らぬ子に皆取らる恋歌留多
何はともあれ買初に文庫本

青木啓泰

初詣まっすぐ帰り雑煮椀
初詣心のこりの鼻毛かな
初日の出マフラー伸ばして頬被り
初風呂や手足浮かせて臍が鳴る
初日の出恵方道にはずれている

浅野正美

掛軸を鶴の絵に替え年迎ふ
ベッド前孫の絵を貼る去年今年
初雪や今年は良い事ありそうな

一病の難を免れ年酒くむ
礼者去り大皿に移す料理かな

武者昭七

満天を染めて茜の寒暮光
蝋梅の花開けりと妻の声
江の電の窓越し初日昇りけり
少年の瞳にも似た今朝の春
左義長の炎の柱天を焼き

小山陽也

正月も相変わらずの落葉たく
元旦や一家六人昇殿す
二日には子供等四人津に帰り
下町も門松の家少なし
二日から老々二人の口喧嘩

田宮敦子

雉鳩が逃げ込む笹や成人日
負けまいと少し膝出す歌留多会
女正月行く当てもなくお洒落する
松過ぎの爪研ぐ猫や根津神社
花びら餅友と二人の時間かな

選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

5　煮凝や夜どうし荒るる越の海　紀子
3　元旦のきのふと同じ顔洗ふ　孝三
3　荒縄のへの字に焼けりどんど果つ　紀子
　荒縄のへの字に焼けるどんどかな
3　恋知らぬ子に皆取らる恋歌留多　幸一
3　大皿のピザを真中に女正月　紀子
3　蝋梅の花開けりと妻の声　昭七
2　昭和生き元朝古き日の丸を　孝三
2　松過ぎの爪研ぐ猫や根津神社　敦子
2　鶏の初鳴き一番電車まつ　多美子
2　江の電の窓越し初日昇りけり　昭七
2　竹爆ぜて人輪広ごる飾り焚　紀子
2　ジーパンで葱買ふ芸者神楽坂　幸一
2　二日から老々二人の口喧嘩　陽也
2　初電車一輌目にて富士をみて　多美子
2　松過ぎの庭に黒猫三毛の猫　〃
2　初泳後ろ後ろへ水送り　高志
2　口あけて喉の奥まで初日浴ぶ　みち

1 左義長の炎の柱天を焼き　昭七
1 女正月行く当てもなくお洒落する　敦子
1 ＥＵ崩壊かと新年のパンを食ふ　陽一
1 掛軸を鶴の絵に替え年迎ふ　正美
1 頼りなく回りはじめし独楽の澄み　幸一
1 獅子の歯の奥に目ん玉ありにけり　孝三
1 あわんとり唱和し点火あわんとり　高志
（あわんとりはどんど焼きのこと）
1 正月の千両椋鳥むくに食はれけり　みち
1 雪は北に捨てて青さよ首都の空　陽一
1 ベッド前孫の絵を貼る去年今年　正美
1 我が齢信じられずに雑煮かな　多美子
1 黒豆の減るを淋しむちょろぎかな　幸一
1 初読や柳田國男の恋の歌　みち
1 雉鳩が逃げ込む笹や成人日　敦子
1 先の世に見し門松と思ひけり　陽一
1 犬棒カルタぶっきら棒に読み下す　高志
1 負けまいと少し膝出す歌留多会　敦子
1 掛り凧ポプラ並木の一本に　みち
1 満天を染めて茜の寒暮光　昭七
1 何はともあれ買初に文庫本　幸一
1 松過ぎの爪研ぐ猫や根津神社　敦子
1 青竹の器と柄杓屠蘇受ける　みち
1 初詣まこと六根椎の木に　高志

初日の出マフラー伸ばして頬被り　啓泰
昼酒にマーラー語る炬燵かな（作曲家グスタフマーラー）　紀子
一病の難を免れ年酒くむ　正美
元旦や一家六人昇殿す　陽也
初鶏の声に覚めしは昔かな　陽一
初詣がてら七味のやげん掘　孝三
初風呂や手足浮かせて臍が鳴る　啓泰
二日には子供等四人津に帰り　陽也
初雪や今年は良い事ありそうな　正美
屠蘇なめて乙女のつやの耳ツ朶　孝三
初詣心のこりの鼻毛かな　啓泰
春・福てふ犬に邂逅二日かな　高志
礼者去り大皿に移す料理かな　正美
深酔ひは醒むる似たり初明り　陽一
下町も門松の家少なし　陽也
初日の出恵方道にはずれている　啓泰
少年の瞳にも似た今朝の春　昭七
花びら餅友と二人の時間かな　敦子
正月も相変わらずの落葉たく　陽也
女正月ほんの少しの贅沢を　多美子
初詣まっすぐ帰り雑煮椀　啓泰

一句鑑賞

光成高志

元旦のきのふと同じ顔洗ふ　孝三

自分の顔は元旦であろうがなかろうが昨日とは同じ顔である。元旦に顔を洗ってあらためてそう思ったのであるが、それは永遠にそうではないことに気付いてまた顔を愛ぃとおしんで洗ったのである。元旦はそういう不易を気づかせてくれる日でもある。元旦のあり様と人間の心の動きを想像させる佳句である。「元日や手を洗ひをる夕ごころ」（芥川龍之介）は元日の夕方のこころばえを詠った名句であるが、掲句はまさに元旦のそれである。元朝の別句は、その後の感慨であろう。孝三さんの平成二十七年の元旦の心理がよく伝わってくる玉句をいただきました。

満天を染めて茜の寒暮光　昭七

満天を茜に染めた寒暮の光りを描写した句である。茜に染める夕日は冬夕焼あるいは茜に染めるから冬茜といい、寒中では寒茜という季語がある。寒暮は寒の暮であり、その夕日光を寒暮光と表現した季語である。だから茜の空を表しているわけではないから、茜に染めた寒の暮の夕日の光りに焦点を当てたのである。そうすると、「満天を茜に染めて寒暮光」と理に落ちた句になってしまう。それは寒茜の一語で表現できる。寒暮光の例句は少なく、「沼鴨の射たれて早く寒暮光」（角川源義）「斧一丁寒暮のひかりあてて買ふ」（福田甲子雄）「寒暮光痩せたるヨハネさらに痩す」（藤井亘）くらいしか見当たらなかった。掲句はやはり、冬の暮、寒暮、寒暮光という季語に沿った句に作り変えたほうがいいと思います。

黒豆の減るを淋しむちょろぎかな　幸一

恥ずかしながら今回はじめてちょろぎを知った。長屋璃子さんの俳句から。山尾かづひろさんが送ってくれる俳枕209に掲載されていた。広辞苑には写真つきで載っている。シソ科の多年草で、地下に生ずる巻貝に似た塊茎は食用になり、赤く染めて重詰めの黒豆に添えて色取りとする。漢字では草石蚕と書く。掲句は黒豆ばかり箸が伸びて減っていくのを淋しいとちょろぎが言っていると擬人化した句であり、自分がちょろぎになっているのである。人生に韜晦されている、あるいは放下されている作者ならではの擬人化である。そう思います。

大皿のピザを真中に女正月　紀子

女正月は一月十五日。お節を作り正月料理で賀客をもてなし更に夫舅姑挙句小姑のために松の内までせっせせっせと台所に立ってきたあたし、女正月くらい、ピザを頼んで、その大皿を真中においてどうぞ。やれやれと台所の隅でペロリと舌を出している若い嫁さんを小津安二郎なら被写体にしそうな場面。女正月の現代版である。

一句鑑賞　武者昭七

煮凝や夜どうし荒るる越の海　紀子

僕らの遠い祖先がこの列島の北の浜辺に住みつく以前から越の海（当時はそんな名すら持っていなかったろう）は洋々と広がっていた。それは夏の湖水のように凪わたり冬は獅子のように吠えた。今作者が聴いている荒波の響きはそんな太古からの海の声なのである。台所の片隅に置かれた夕餉の皿の底にこびりついた煮凝りが明日も続くかもしれぬ荒天への怖れにかすかに震えている。そんな状景が浮んでくる。

春・福てふ犬に邂逅二日かな　高志

正月二日初詣の途中であろうか、春という名の犬と福という名の犬に巡り合ったというのであろう。近頃珍しい名である。それにしてもどうして作者はそんな名だと知っているのだろう。あるいは縁起かついであって勝手につけてみただけのことかも知れぬ。とすればやはり作者は暮らしの達人である。幸せの年になりますように。

先の世に見し門松と思ひけり　陽一

不思議な句である。（だいたい先の世なるものを信じている人間が現代にどれだけいようか。）目の前の門松は作者がこの世に生まれる以前から正月ごとにそこにあった。それに今気づいたというのだ。そうしてみれば人間の「記憶」というものははるかに時空を超えたものかもしれぬ、そんなことを考えさせる句である。

昭和生き元朝古き日の丸を　孝三

思えば昭和という時代はなんとも苛烈な時代であった。平成という時代から振り返るとき特にそう思う。祝日ごとに門口に日の丸掲げた時期もあり、一転して赤旗と怒号の波が公園を埋め尽くした時期もあった。そして今、これからの時代は何処へ向うのか。元日の朝、ところどころに黄色い沁みなど浮き出した古い日の丸取り出して眺めては昭和を生きてきた老人は思いにふけるのである。

一句鑑賞　松村幸一

煮凝や夜どうし荒るる越の海　紀子

出来すぎと言いたくなうような出来た句。荒海の越の国であれば、魚は何であれさぞかし立派な鰭を張って、それに水溶きした葛や寒天を加えたら、そのとろける舌ざわり具合は一体どんなであろうか、と思わず唾を呑みこみたくなる一句。下町長屋住まいの浅い鍋底に、へたっと張りついた食べ残しとのわびしい煮凝経験しかもたないぼくには、この句に描かれた台所の光景を、想像する手がかりがない。それだけに潮騒を背景にした磯ものの魚が、夜通しかけてどういう結晶体を完成させてゆくものかと、読み手を眠れなくする誘いに充ちた一句。出

来すぎと讃嘆したくなる所以。

初泳後ろ後ろへ水送り　　高志

初の文字を冠した新年の季題は沢山あるが、初泳というのはあるのであろうか。例句があるか当ってみようと思ったが、しんどくて止めた。でも叙された一句の描写は、紛う方なく新春プールの室内風景だ。後ろ後ろへ水送りとはあたりに気兼ねのいらない空間で、いかにものびやかにほしいままにふるまっている姿態が見えて来、併せて新春の晴れやかさが横溢する。こういう目出たくも贅沢なお正月の過ごし方もあるのだった。

先の世に見し門松と思ひけり　　陽一

この句ははじめのうち、見過ごしてしまった一句だった。先の世に見し門松というのがいかにも抽象的で、読み手の胸にイメージとしてすぐには結ばれ難いからだ。そう思いながら、時間をかけてこの句の前を往きつ戻りつしているうちに、きっと作者の胸に当節の門松がかつて遠い日になじんだあの門松とは違う、という諦念があるのではないかと気付いて来た。読み違いだったらお許しを乞う。

ぼくは下町根岸の貧乏な長屋住いで、三十年暮らした。昭和の戦前は正月が近付くと、鳶職の人たちが賑やかに来て、軒並みに細い縄を張り、戸口に小松を括り付け、青竹を立てて行った。せまい路地の空に俄かに林立した竹の葉叢の風に鳴るのを、夜の枕上みにも聞いて胸躍らせた。門などなくても、門松だった。「松竹立てて門ごとに祝う今日こそ楽しけれ」、あの小学唱歌だけは君が代などと一とフシちがって、口を大きく張って歌えた。あの門松は、あのお正月は、一体いつどこへ行ってしまったのだろう？あれは前さきの世に見た幻の門松だったのだろうか？ぼくの解は以上に尽きる。この作者は同時に「EU崩壊かと新年のパンを食ふ」がある。新年でも違和感などと言ってはいられずにパンなども食べて過ごしているのが、二千十五年の生活者の実相なのである。

昭和生き元朝古き日の丸を　　孝三

一読、人困らせな句に出合った、とつい悲鳴を上げたくなった。あの君が代の歌と同様に日の丸の旗にも、ぼくには一言で尽きせぬ屈折したアンビバレントな感情の歴史がある。青春が戦争と重なりしかも辛うじて生き残った世代は、ことにそうではなかろうか。人困らせというのは、文末の「を」切れにかかわる。日の丸をどうしたのであろうか、軒先に掲げたのだろうか、あるいは広げて思いに耽っているのだろうか。ぼくの記憶でいえば、戦後も永いことそれは箪笥の底に畳まれたままだった。天皇制廃止の声が高々とあがる解放の世になって共産党に入党したこともあるぼくも、それでも旗を処分する気になれなかった。かえって、太宰治がそうだったように、

天皇制も国旗もいつまでもそっと大事に守りたい、と考え直しさえした。もしもこの句を、ナショナリスチックな復古主義者の心意気とでも解釈したら句が浅まになり、目も当てられぬ月並みに落ちる。明治よりも長かった昭和六十余年の歴史の厚みも深みも明も暗も飛んでしまう。願わくば君とともどもに白地の布の煤けた日の丸の旗を前にして、語りきれぬ昭和を、そしてそれにつづく戦後の歴史をそれでも語り合いたい。そう告げているのがこの一句の志ではなかろうか。

一句鑑賞　　増田陽一

煮凝や夜どうし荒るる越の海　　紀子

越の国の何処か、北陸道若狭、越前、佐渡・・と範囲は広いけれど何処も冬荒れの日本海に面していて、そこで夜通し日本海の荒れる音を聞いているのである。冬怒涛を聞く中で、厨に置かれた鰤の煮汁が冷え固まっていくイメージが浮ぶ。『煮凝』には日本海の豊かな魚類が想像されるけれど、代表は鰤であろう。一句の中に北陸の冬の厳しさと情緒が凝縮されている。

あわんとり唱和し点火あわんとり　　高志

僕は無知なので、「あわんとり」という行事を知らず、ユーモラスな語調の繰返しだけが魅力で注目した。『会わん鳥?』『泡ん鳥?』これは「どんど焼」、「左義長」のことで、我孫子市新木の年中行事だそうであった。「粟の鳥もホーイホイ、稗の鳥もホーイホイ」という鳥追い歌を唱和するのである。正月過ぎ、松飾りなどを持ち寄って「お焚き上げ」を行い、残り火で餅を焼いて、五穀豊穣を祈る。全国にある習俗だけれど、「あわんとり」は千葉、茨城の境（いわゆる、ちばらぎ県）での称という。掲句は下五で「どんど焼」などと説明することなく、「おや?」と思わせる語調を生かして味のある一句に仕立てている。

黒豆の減るを淋しむちょろぎかな　　幸一

お重にはなくてはならない黒豆とちょろぎ。そもそも正月料理のお重は、日本料理の枠を綺麗に取合せたものが、日が経って次第にバランスを崩して行くのが成り行きであった。掲句は『ちょろぎ』と言う、愛嬌はあるけれどほんの料理のアクセントであるものが、主役の黒豆を惜別しているという。擬人法が面白いけれど、ふつうなら黒豆が減る位で「淋しむ」とまで言わないのである。そこから軽妙な句ではないことが判る。

口あけて喉の奥まで初日浴ぶ　　みち

初日に向って深呼吸をしている。喉の奥に今年初めての太陽の熱を感じ、今年も元気で過ごそうと身体感覚を持って言ったところが好くて、年頭の感が何とも積極的で爽やかである。

松過ぎの庭に黒猫三毛の猫　　多美子

正月過ぎて普段の日常に戻った。その庭をふと見ると猫が集合していた。偶々の光景であろうけれど、こう表現してみると何か意表をつく事件の感じがする。字数の上の必要でもあるけれど「三毛の猫」の「の」の字が物々しいのが良い。松過ぎてはや恋猫の季節である、などと解釈しない方が面白い。

満天を染めて茜の寒暮光　　昭七

寒暮の今、東京とその周辺では物凄いばかりの夕焼である。うちの窓からも昨今、恐ろしいほどの夕焼とその裾に遠く富士が見える。掲句はその光景を活写した渾身の力ある作である。

元旦のきのふと同じ顔洗ふ　　孝三

元旦は特別の日であり、「今日何もかも新しく」と、誰やらの句にもあったけれど、普段は「淑気」などと、今日では感じにくいものになっている。むしろ何も違いがない、と当たり前のことを言ってみて反って元旦の気が感じられないか。これも「俳味」である。掲句はそれを端的に示している。

ハガキ句四十六報管見　　飯田孝三

大木を抱きて春を惜しみけり　　裕子

秋思には芯があるが、春愁は茫々芯もかたちもない。同じく、主情の季題でも「春を惜しむ」はより精神性が深い。「行春を近江の人とおしみける」（芭蕉）は、霞けぶる湖上（畔）に春を惜しむのである。（主眼は朦朧の湖水であって、近江の〈人〉は場のあいさつ。吟詠のきっかけ。）同じ一生でも人と大樹では比較にならぬ。人は大木の幹を滔滔と流れる内なる響きに悠久にも似た営みを思う。「春を惜しむ」とは人間の存在を超える大きな実在に感じるこころなのだ。敢えて音便はせぬ「抱きて」に惜春のこころがしみじみ切々。末「～けり」が響き合う。

ハガキ句四十六報（'09／5／1）

花筏割り入る淀の棹捌き　　孝三
み仏おかんばせ石楠花溢れたり　　〃

東京クラブ4／29報より三句

ビル窓に映る燕の速さかな　　輝子
啄木忌十字シール溜りたる　　璃子
鴟尾磨く余花の雨きて東大寺　　万世遊

四月二十四日蝉噪会旧古河邸・六義園七句

大木を抱きて春を惜しみけり　　裕子
行く春や水に棲みつくものの数　　たか子
たまゆらの日差しに揺れて羊歯若葉　　かほる
水辺のつつじの花や救命具　　君夫
涙石に楓の落花鮮らけし　　英明
梵妻の土間を手拭きす白牡丹　　敏子
心字池をなぞるが如くつばくらめ　　高志

これが「抱いて」、「抱えへ」では句にならぬ。

啄木忌十字シール溜りたる　　**璃子**

東京倶楽部句報で初見し、「複十字」マアークは見覚えがあるが何の標か思い出せず、ただ、結「たる」に思ひがけぬ「驚き」を見てとった。高志さんの書いた注記で、結核予防のシンボルと知り、今、尚つづく脅威と、啄木以後、百年の歳月を思えば、なるほど「驚き」が腑に落ちる。感慨は複雑だ。ただ、啄木と結核との近縁がいささか一句のふくらみを損なっていないだろうか。

梵妻の土間を手拭きす白牡丹　　**敏子**

嵩む白牡丹が目に見える。何かある太みと奥行きを感じる。牡丹は「白」でなければならない。とはいえ、時間を置いては、考えてみるのだが、「土間を〝手拭きす〟」の所作が読めない。管見の鑑賞力の限界という外ない。

心字池をなぞるが如くつばくらめ　　**高志**

燕が地面、水面をかすめるのをよく見る。〝いのち〟はそのスピード感ではないだろうか。上五中七の叙述はそれに遠い。リズムも緩い。嘱目が昇華しきれていない憾みがある。そんな気がする。

心字池一筆書きにつばくらめ　　に推敲　（作者Ｈ26）。

鴟尾磨く余花の雨きて東大寺　　**万世遊**

「余花の雨きて」は手練。雨に濡れる若葉にそそる鴟尾の燦めきが見える。東大寺ならではだが、その割りに「東大寺」がかすむ。賑やか。「磨く」をいうか敢えていうまいか。擬人は時に句格を減じる。

行く春や水に棲みつくものの数　　たか子

水に「棲みつく〝ものの数〟」が眼目。流れに犇く〝いのち〟に感じる。これも又惜春。

水辺のつつじの花や救命具　　**君夫**

つつじの緋は水によく映える。過日、某所でそういったら、つつじは水と無縁、陸の花と言われた。が、ぼくの印象は引っ込めない。だから、救命具が納得でき、意外でもあり、斬新、面白い。

ビル窓に映る燕の速さかな　　輝子

伝わる。が、「映る」は説明。驚き、不思議がない。

たまゆらの日差しに揺れて羊歯若葉　　かほる

「揺れて」は冗。「たまゆら」の雅語が働かない。

涙石に楓の落花鮮らけし　　英明

語群賑やか。ために印象が薄い。妄言多謝。

（平21．5．30）

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭今年度最終号頂きました。毎度のことながら圧倒されています。都鳥、神楽のやうな難題ですばらしい句を発表していますね。今年も本当にありがとうございました。来年もまたよろしくお願い申しあげます。机上

に歳時記を置いてありますが、そのままです。ボケながら元気でいます。良い御年を。（12．30小山陽也）

今年もどうぞ宜しくお願い致します。術後二ヶ月となるところですが、外出は自信がなく句会は欠席させていただきたく、よろしくお願いいたします。「白金葭」を読みながら句会の雰囲気を感じております。皆様にとりまして健康で幸多き年でありますようお祈り致します。

（H27．1．7　浅野正美）

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。来る1／16（金）の一月例会と新年会急用で出られなくなりました。楽しみにしていたのに残念です。出句五句を別にお送り致しますので、何卒よろしくお願い申しあげます。御盛会を祈り上げます。

（H27・1．8　飯田孝三）

一月例会、新年会出られず残念です。別添のとおり出句いたしますので、お手数ですが何卒よろしくお願い申しあげます。二月には再会が楽しみです。高志兄

（1．13飯田孝三）

金子兜太先生の真栄寺講話味読させていただきました。水戸時代の話何度か聞いております。「白梅や孝子無心の旅にゐる」は水戸に句碑があります。建立祭の折来水した兜太先生が講演で下宿の水戸のお嬢さんの茨城弁を聞いて思いの心も一瞬に消えたと言っておられたが、この下宿先の嬢どんなアクセントで茨城弁をしゃべっていたのか。壁に耳あり云々忘れてはしゃいでいたのだろう。光成高志氏が「銀行員等銀河のような眼鏡かけ」に評言してくれたこと非常にうれしく思いました。新年会参加させていただきます。のこのこ出て参ります。取手から。

光成高志様　（平成二十七年一月十三日青木啓泰）

新春第一報です。今年もよろしくお願い申しあげます。会費同封致します。古代は別便、新年会用の万年堂よりは一日前に着くと思います。とにかくのんびりとすごしています。皆様の益々の御活躍を祈ります。

光成様　一月12日　小山陽也拝

拝復「白金葭」第46号を有難く拝受。感謝しています。

深川に深川めしや都鳥　**吉羽多美子**

都鳥は鳥類図鑑で確認し、海釣りの時に度々出会うユリカモメたちを連想。深川と来ると、富岡八幡や不動尊（成田不動尊の分祠）から平将門や藤原秀郷や平貞盛まで連想。京都の神護寺の不動明王を奉じて平将門の誅滅を祈り、将門の乱の平定後に堂宇を建てて、現在の成田山新勝寺に至る由。九四〇年僧寛朝の実績。のちに歌舞伎の初代市川団十郎がご利益に感謝して、歌舞伎十八番の一つ「不動」を明石清三郎と合作で上演し、好評を博し、成田山のＰＲに多大な貢献。初代団十郎は一六六〇―一七〇四、四四歳没の一生。市村座の舞台で生島半

六に刺殺されたという悲劇的最後になった名優。脚本は三升屋兵庫のペンネームで執筆。屋号は成田屋。連想は拡大飛翔。「深川めし」も広辞苑で再確認。アサリのむき身を炊き込んだ飯も「深川めし」と呼称される由。門前仲町の地下鉄駅で下車して、深川八幡神社にはことあるごとに参拝するのに、深川めしは食べた経験はなく残念。銀次郎の初めてのお見合いの相手は同八幡の正門の斜向いの井田ビルのオーナーの博子さん。彼女のご健康も併せて祈念。ご縁にも感謝。

またなにかさびしくなりぬ初鏡　　**河野南畦**

女性も（本誌の作者でないので以下略）

敬白（H27―二〇一五―1・14）

追伸：会員の皆様のご健康とご健筆を祈念。

光成高志様机下　　河村博旨

新年の行事を終え日常に戻りましたが人生の終盤迄多忙であることを覚悟しました。昨日は初句会でした。月一回の例会で一月は毎年千円以内のプレゼント交換があります。各人六句提出したものを投票方式の総合点で私は初めてのトップになりました。主宰からの色紙と持ち寄った品を最初に選ぶ権利で「虚子百句」が当りました。余生の遊びにしては追われるような忙しさを伴いこれは仕事だと考えることにしました。誰にも見せられないと思いお送り出来ませんでしたが、昨日の提出分を恐る恐るの思いで送らせて頂きます。十年選手が十人のところへ私達二人更に三人と計十数名の支部になったところです。太陽会全体としては百名前後のようです。ベテランの高位置の方の作品も新人が読めば難しいことも含めて私如きが一位もあるという面白さもあります。

初鴉神の森から遣わされ

・雪激し遠くなりゆく大鳥居

・息を呑む等伯展や雪の寺（京都博物館前の智積院）

顔見世や「お終いどすな」交わす声

・大晦日今年を洗い明日新（毎年我家中の窓を外して洗います）

初詣で半分笑うみくじかな

・印の句は票を頂きましたが、顔見世の句は京都の年末挨拶で難しかったようです。入会当時は“はい季語三つですね”といわれる新人から二年目の作品ですが一ヶ月に一度の指導を受ける身は成長の後もあまり見えません。八十才になった時認知症対策になったかどうかを目下の着地点にしたいと思います。今年も元気に動きまわりたく願っています。どうぞ宜しく御指導お願い申しあげます。光成高志様　　大橋勝子

追伸：そちらへの投句はもっと量産できなければと尚ためらっています。

（私の選評などは別便に認めました。本誌では選と鑑賞に力点を置いていますので、遠慮なさらずに、どうぞ投句下さい。高志）

新年会楽しく過ごさせて頂きました。とりあえず“一句鑑賞”のみお送りします。“旅のうた”は後便に託します。

一月十七日　武者昭七

先日は「備前」での楽しい新年会でお世話になりました。あの店は安くて美味いですね。それはよかったけれど、僕も一寸飲んだだけで、昭七さんと詩の話をしていて途中で涙止らず、そのあとも俳句について何だか変なことを放言していたのを朧げに覚えています。済みませんでした。幸い無事に帰りました。今年もよろしく。

一月二十日　増田陽一

受贈誌（H27年1月号）

寒旱富士の白道電工形（彩120号）　平野ひろし
冬籠朝餉終ゆれば十一時　（〃）　〃
落葉踏む笑ひ羅漢のこゑがして（〃）　〃
深々と帽子頭の無き案山子（〃）　平山三郎
江戸っ子に帰省先なく縄暖簾（飛行雲73号）　駿河岳水
空路来て出雲の黒き走り蕎麦　（〃）　〃
秋薔薇剣のやうな蕾もち（あすか1月号）　山尾かづひろ
草石蚕（ちょろぎ）や知るも知らぬも寺詣で（俳枕209）長屋璃子

俳窓評論纂

＊「日本の近代文学を代表する作家・谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）が亡くなって今年で半世紀。その知られざる素顔を語る大量の資料が見つかった。「細雪」のモデルで「創作の源泉・女神」と崇められた妻・松子らとの間で交わされた288通の手紙だ。谷崎研究の専門家は「超一級の資料。谷崎の伝記も書き直す必要がある」と語る。谷崎が40歳の時に出会った二人。互いに家庭があったが8年越しで恋愛を成就させ、谷崎が79歳で亡くなるまで添い遂げた。手紙からは、その間約40年に刻々と変化していった夫婦の関係性や心の機微、そして、太平洋戦争の最中も谷崎が「細雪」を書き続けた背景などが浮かび上がってくる。著名人に手紙を読み解いてもらいながら、現代にも通ずる夫婦の愛について考える。」

以上は一月七日にNHKで放映された案内文。著名人とは高橋源一郎だった。戦時中文人はみな沈黙したが、太宰治と谷崎潤一郎だけは作品を書き続けた。細雪のような大作を出版の当てもなく書いた動機は社会に対する怒りではなかったか。商家の華やかな生活、富豪者の生活土地文化を見つける作業。やさしい円やかな世界これが日本文化の源流ではないか。源氏物語を翻訳していく中でも主人公は女性達であり、戦争に明け暮れた東の国のまともな事としていることとは違う自由さをもった西の国の文化が本来の日本の文化ではないかと思ったのではないかというようなことを喋っていた。私も時にそう思う

ことがあるので、ここに紹介した。

＊「雷魚」百号を増田陽一さんから貰った。これが終刊号である。各同人の方々が毎回十句掲載されたが、今回は五十句づつ発表されて記念号とされている。昭和六十二年秋から平成26年十二月までほぼ三十年間に百号出された。八田木枯さんが天狼で活躍されていたことから、また斉藤嘉久さんも同人であられたので時々頂いていたので親しみがあった。その後、亀田虎童子、小島良子、増田陽一、松下道臣さんらの句に触れることになり、より親しみが湧いたが、私の及ぶような句はほとんどなかった。難しい句が多い。最近の句はしかしながら、わかりやすくなったと思っていたのに。

共鳴りの聖夜の鐘と救急車　増田陽一
薄膜に首都全景や石鹸玉　〃
春尽きて少女と猫は共犯す　〃
もやもやとして取り敢えず生ビール　松下道臣
土手鍋に小保方博士の割烹着　三橋孝子
非の打ちどころなく白桃をてのひらに　亀田虎童子
野の風に扇子の風を足しにけり　〃
蓮見舟沼の深処にかかりけり　小島良子

自選五十句は次号以降に譲ります。とにかく俳句も親しまなければ心に迫ってこない。絵画も音楽も芸術はそういうところがある。

旅のうたを読む　XI　―旅の花火―

武者昭七

ねむりても旅の花火の胸にひらく　**大野林火**

ねむっていても旅で見た花火が夢の中で胸いっぱいに開いてくるというのである。「ねむりても」というのだから体を横たえているだけではない。眠りという無意識の深い層の中で花火が音もなくひらくのである。過去形ではなく現在形だから花火はいま夢の中で華麗に花開いているのだ。

「胸にひらく花火」は遠花火なのか眼前の花火なのか、あるいは現実の花火なのか、それとも旅で出会った、花火のような一瞬のまばゆいほどに鮮烈な出来事の暗喩（アレゴリー）なのか、それは作者ならぬ読み手の想像力にまかされている。写生句をこえた旅情と、甘美な情趣との匂う浪漫の香り高い句である。無音の花火の句をもう一句あげよう。

遠花火開いて消えし元の闇　**寺田寅彦**

遠花火の消えた後夜空に元の闇が戻ってくる。花火の残像を追いながらひとはそれぞれの家路につくのだが、後には前にも増して深い闇がひろがっていることに気付く人は少ない。作者はそれを見つめている。

我孫子日記

12/20 例会	
12/23 注連縄作り	
12/28 * 銀座	
1/1 *2 初詣	
1/3 *3 賀客	
1/4 *4 初泳	
1/9 *5 根津	
1/10 *6 水元公園	
1/11 *7 あわんとり	
1/14 SOA	
1/16 例会	

* 歳晩や改札口の人通り　高志
*2 元旦の鴉の声の澄んでをり　みち
　元日は御嶽神社の扉開け　高志
　元日の國男の墓に尉鶲　みち
*3 犬棒カルタ手加減なしに取りにいく　高志
*4 初泳温水肌にまろやかに　〃
*5 寒椿人影まばら神輿蔵　敦子
　将軍胞衣塚寒の大石咬み合へり　良子
　鷗外の腰掛石だ寒四郎　高志
　火気厳禁と立札高く寒日和　敏子
*6 北風吹くや葉擦れの音のにぎやかに　高志
　鴨は鴨鷗は鷗群れて浮く　〃
　懸凧散歩の犬の紐長く　みち
*7 豚汁番人五右衛門煮るに似て　高志

編集後記

ああ大和にしあらましかば　薄田泣菫

あゝ、大和にしあらましかば
いま神無月、
うは葉散り透く神無備の森の小路を、
あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、
斑鳩へ。（以下略）は旅のうたを読むⅫ武者昭七さんの冒頭の詩の一節。すでに原稿を頂いております。同じ所を歩いたご縁に驚いてこれを掲載するつもりで編集していましたが、やはり来月に回します。句会後の懇談そして新年会を通じて多くの詩人の名前が上り、詩の暗誦もなされました。とても中身を覚え切れなかった。名前だけあげます。薄田泣菫、三好達治、小林秀雄、中原中也、谷崎潤一郎、宮沢賢治、萩原朔太郎、上田秋成、蒲原有明、草野心平、ブラウンニング、ヴェルレーヌなどであった。例会の翌日、茨木和生主宰「運河」の吟行句会に出て非常に感ずるところがあった。この時の句と選も来月回しにします。大橋勝子さんが俳句を始められて初めて手紙をもらったので、本誌に紹介し本誌をお送りました。小石川後楽園に最近よく行きましたので、次の吟行地は、築地場外市場にしようと思っています。五月一日（金）を予定しています。

白金葭　第47号　平成27年1月発行　編集・発行人　光成高志（TEL&FAX　04-7187-1068）発行所〒270-1119我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字：加納綾女。写真は1月24日の白金葭